B-5

南琉球宮古島旧城辺町新城方言における二重主語文と所有傾斜[1]

王　丹凝
(九州大学大学院/日本学術振興会特別研究員)
rabbitlvy@yahoo.co.jp

要旨：本発表の目的は，南琉球宮古語新城方言 (以下，新城方言) における二重主語文を記述し，その使用制限を説明することである。本発表では，二重主語文の外主語と内主語の間に成り立つ所有関係に着目した上で，以下の 2 点を主張する。

a) 新城方言の二重主語文の使用制限が所有傾斜 (角田 1991) により概ね説明できる。すなわち，所有傾斜のある地点で二重主語文が可能なら，それより上位でも可能である。
【所有傾斜：身体部分＞属性＞衣類＞ (親族) ＞愛玩動物＞作品＞その他の所有物】

b) 二重主語文の述語の品詞(形容詞，名詞)も関与的である。所有傾斜のある地点で形容詞述語文の二重主語文が可能なら，名詞述語文の二重主語文も可能である。
【使用可能領域：名詞述語文＞形容詞述語文】

1. はじめに

本発表の目的は，南琉球宮古語新城方言 (以下，新城方言) における二重主語文を記述し，その使用制限を説明することである。二重主語文は，外主語と内主語が広義の所有関係 (全体・部分，主体・関連物など) を持つ非動詞述語文を指す。形容詞述語の二重主語文の例を (1ab) に，名詞述語の二重主語文の例を (2ab) に示す。

(1) **形容詞述語**

a. *karjaa* *mii=nu=du* *upu+munu.*
3SG.TOP 目=NOM=FOC 大きい+AJLZ
「彼は目が大きい。」

b. **karjaa* *fuku=nu=du* *upu+munu.*
3SG.TOP 服=NOM=FOC 大きい+AJLZ
「彼は服が大きい。」

(2) **名詞述語**

a. *karjaa* *uja=nu=du* *zin+mucjaa.*
3SG.TOP 父=NOM=FOC 金+持ち
「彼は父がお金持ちだ。」

b. **karjaa* *jaa=nu=du* *pztukjuu+jaa.*
3SG.TOP 目=NOM=FOC 一軒+家
「彼は家が一軒家だ。」

(1b)(2b) で例示されるように，標準語では容認されるような二重主語文が，新城方言では容認されない場合がある。これまでの琉球語研究において，二重主語文の使用制限に関するこのような事実は指摘されたことがない。本発表では，二重主語文の外主語と内主語の間に成り立つ所有関係 ((1a) は【所有者-身体部分】，(1b) は【所有者-衣類】など) に着目した上で，新城方言の二重主語文の使用制限が，(3) に示す所有傾斜 (角田 1991) により概ね説明できることを主張する。

(3) 所有傾斜：
【身体部分＞属性＞衣類＞ (親族) ＞愛玩動物＞作品＞その他の所有物】
(角田 1991:119)

[1] 本発表は，JSPS 特別研究員奨励費 19J20288 の助成を受けている。本調査において協力してくださった宮古島新城地域の話者のみなさま，特に新城方言を教えていただいた友利ご夫妻に，深く感謝申し上げたい。なお，発表における誤謬は全て発表者に帰する。

端的に言って，形容詞述語の場合，その内主語が【身体部分】【属性】までは使えるが，それ以外では使えない。形容詞述語 (1b) は内主語 *fuku*「服」が【衣類】であるため，二重主語文が使えない。名詞述語の場合，その内主語が【身体部分】【属性】【衣類】までは使えるが，それ以外では使えない。名詞述語 (2b) は内主語 *jaa*「家」が【その他の所有物】であるため，二重主語文が使えない。

2. 新城方言の概要

2.1 地理と系統

新城方言は沖縄県宮古島市宮古島の南東部に位置する旧城辺町新城地域で話されている方言である。以下，Pellard (2015: 15) に基づく琉球諸語系統関係 (**図** 1) と宮古島と新城地域 (**図** 2) を示す。

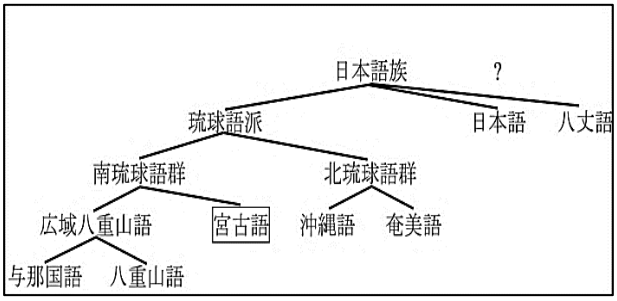

図 1. **琉球諸語の系統**

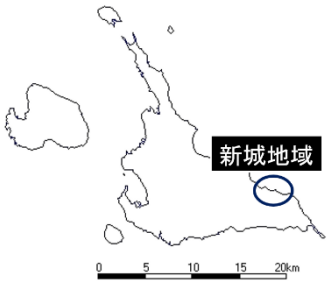

図 2. **宮古島と新城地域**

2.2 形容詞文と名詞文について

宮古語では一般に，形容詞語根と名詞語根がかなり生産的に複合し，標準語では句で表現するような内容も自由に複合名詞で表現できる。例えば，新城方言で「綺麗な字」は *kagi*「綺麗な」と *zii*「字」の複合名詞 *kagi+zii* で表現し，「大きい字」は *upu+zii* と表現する[2]。新城方言の場合，「彼は字が綺麗だ」という叙述の意味を表す場合でも，述語が (ある意味で主語と呼応して) 複合名詞になることがよくある（王 2019）。

(4) *karjaa* *zii=nu=du* *kagi+zii.*
3SG.TOP 字=NOM=FOC 綺麗+字
「彼は字が綺麗だ。」(lit. 彼は字が綺麗な字だ。)

この複合名詞構造を起源とし，主要部名詞語幹が形式名詞 *munu* になったもの (*kagi+munu* など) は宮古語の研究で *munu* 形容詞や準複合形式 (下地 2018) などと呼ばれる。

(5) *karjaa* *zii=nu=du* *kagi+munu.*
3SG.TOP 字=NOM=FOC 綺麗+AJLZ
「彼は字が綺麗だ。」

(5)にあるように *munu* の「もの」としての意味は希薄化し，さらに *sabici+munu*「寂しい」，*aci+munu*「暑い」など感情・感覚形容詞語根とも複合する。このような意味的性質と，複合名詞と違って項に立たず，述語位置にほぼ固定して生じることから，本発表では準複合形式を複合名詞ではなく形

[2] このように，宮古語では標準語の形容詞(「大きい」など)と形容詞動詞(「綺麗」など)の区別なく，同じ振る舞いをする(下地 2018)。

容詞として分類する。なお，名詞の下位分類として分けるか，名詞と対立する品詞とするかは本発表では重要な問題ではない。本発表で重要な点は，二重主語文の振る舞いに関して (4) のような名詞述語の場合と (5) のような形容詞述語の場合で異なり，その意味でも上記の区別は有意義であるという点である。

3. 二重主語文

述語動詞が 2 つの必須項を要求する文(**二項述語文**)は，「太郎が次郎を殺す」のような動詞述語文のほか，非動詞述語文(すなわち，形容詞文，名詞文)も存在する。非動詞述語文は，以下に述べるように，二重主語文と他動形容詞文に分かれる。

二重主語文は，外主語と内主語が広義の所有関係 (全体と部分，所有と被所有，主体と関連物) にある。二重主語文が形式的には二項文であるが，意味的には一項文的である。すなわち，内主語 (被所有物) の存在は外主語 (所有者) の存在が前提となっており，内主語だけが独立して存在することはありえない (下地他印刷中) 。意味的な一項文的性質は，統語的な特徴にも反映する。すなわち，論理的意味を変えずに，外主語の主題標識を属格に変え，外主語と内主語を一つの名詞句に転換することができる (三上 1957 の「ノの兼務」)。新城方言の場合も同様である。

(6a) *bajaa* *anna=nu=du* *aparagi+munu.*
1SG.TOP 母=NOM=FOC 綺麗+AJLZ
「私は母が綺麗だ。」【二項】

(6b) *ba=ga* *anna=a* *aparagi+munu.*
1SG=GEN 母=TOP 綺麗+AJLZ
「私の母は綺麗だ。」【一項】

一方，**他動形容詞文**においては，経験者は刺激を感知する主体であり，内主語刺激は外主語経験者の知覚を引き起こす原因となる。すなわち，述語が独立した二項を要求する。新城方言の場合も同様で，同じ意味のまま属格を使って転換することはできない[3]。例えば (7a) の二項を属格で結んで (7b) にすることは外形上は可能だが，(7a) の意味を表すことができず，*ba=ga anna*「私の母」全体が経験者項として解釈され，刺激項が別に存在することが含意される。

(7a) *bajaa* *anna=nu=du* *kanasi+munu*
1SG.TOP 母=NOM=FOC 愛しい+AJLZ
「私は母が愛しい。」【二項】

(7b) *ba=ga* *anna=a* *kanasi+munu.*
1SG=GEN 母=TOP 愛しい+AJLZ
「私の母は(誰かが)愛しい。」【一項】

[3] 他にも他動形容詞文を区別するテストはある。例えば，伝聞の=*ca*「だってさ」は，１人称主語の他動形容詞文と共起しないという判定が普通である。なぜなら，知覚の主体が知覚情報を伝聞するのは語用論的に不自然だからである。一方，1 人称主語の二重主語文ではこのような制限はない。さらに，新城方言では未確認であるが，周辺方言(伊良部島方言など)では刺激項が対格標示されることがある。これは二重主語文の内主語の場合には見られない(下地理則, p.c.)。尾上他 (1998) は標準語に関して他動形容詞文も二重主語文の一種とみるが，上述のように両者の外主語と内主語の意味・統語構造は全く異なる。

4. 所有傾斜

以下に述べていくように，二重主語の外主語と内主語の間に成り立つ所有関係が，当該構文の容認度の問題を考える上で最も重要となる。所有関係が文法に与える影響については，分離可能性と所有構文の関連が広く知られる (Heine 1997 など)。このような二項対立に対して，角田 (1991) は所有者と被所有物の間の結合の強さに連続性があるとし，所有者から最も分離しにくい【身体部分】を出発点にした階層を提案している。これを所有傾斜と呼ぶ。

(8) 所有傾斜 (再掲)
【身体部分＞属性＞衣類＞ (親族) ＞愛玩動物＞作品＞その他の所有物】

5. 新城方言における二重主語文

5.1 仮説

新城方言を始め，宮古語全体に広げても，二重主語文の使用制限に関する先行研究は存在しない。よって，本発表ではまず標準語に関する二重主語文の使用制限に関する知見を参考にする。

標準語に関して，角田(1991)は形容詞二重主語文の自然さが所有傾斜と関連すると指摘しており，所有傾斜上位ほど二重主語文が使いやすいとする。ただし，標準語の場合，階層最下位でも全く許容できないわけではない。例えば「彼は家が広い」(「家」は【その他の所有物】)などは十分容認可能であることを複数の標準語母語話者に確認している。

本発表では，新城方言の二重主語文の容認度もまた所有傾斜と関連しているとの仮説に立ち，検証可能な例文セットを使って面接調査を行った。

5.2 調査方法

所有傾斜の全項目を網羅した標準語の二重主語文「X (**所有者**) は Y (**被所有物**) が～だ」の例文セットを話者 3 名に訳してもらい，それが許容されるかどうかを確認した。

5.3 結果

調査の結果，標準語の場合と同様，新城方言の二重主語文も所有傾斜により概ね説明できることがわかった。○は当該カテゴリーの全例文に対して全話者が容認可能，×は当該カテゴリーの全例文に対して全話者が容認不可であることを示す。○/×は，複数の話者間で容認度が一致しなかったことを示す (例えば話者 1 は OK だが話者 2, 3 は NG など)。

表 2. 新城方言の二重主語文と所有傾斜

	身体部分	属性	衣類	親族	愛玩動物	作品	その他
形容詞述語	○	○	×	×	×	○/×	×
名詞述語	○	○	○	○/×	×	○/×	×

(9) 形容詞述語

a. karjaa mipana=nu=du kagi+munu. 「彼は顔が綺麗だ。」 【身体部分】
b. karjaa kui=nu=du kagi+munu. 「彼は顔が綺麗だ。」 【属性】
c. *karjaa kžn=nu=du kagi+munu. 「彼は（着ている）着物が綺麗だ。」 【衣類】
d. *karjaa anna=nu=du kagi+munu. 「彼は母が綺麗だ。」 【親族】
e. *karjaa maju=nu=du kagi+munu. 「彼は（飼った）猫が綺麗だ。」 【愛玩動物】
f. *karjaa hun=nu=du umussi+munu. 「彼は（書いた）本が面白い。」 【愛玩動物】
g.*karjaa jaa=nu=du kagi+munu. 「彼は家が綺麗だ。」 【その他の所有物】

(10) 名詞述語

a. karjaa mipana=nu=du kagi+mipana.	「彼は顔が綺麗だ。」	【身体部分】
b. karjaa kui=nu=du kagi+gui.	「彼は顔が綺麗だ。」	【属性】
c. *karjaa kžn=nu=du kagi+kžn.	「彼は（着ている）着物が綺麗だ。」	【衣類】
d. *karjaa anna=nu=du kagi+pžtu.	「彼は母が綺麗だ。」	【親族】
e. *karjaa maju=nu=du kagi+maju.	「彼は（飼った）猫が綺麗だ。」	【愛玩動物】
f. *karjaa hun=nu=du umussi+hun.	「彼は（書いた）本が面白い。」	【愛玩動物】
g.*karjaa jaa=nu=du kagi+jaa.	「彼は家が綺麗だ。」	【その他の所有物】

所有傾斜を使った一般化における問題は【作品】である。以下では，角田の基準で【作品】とされる一部の例文が【属性】と解釈すべきであり，これを【作品】から【属性】に再分類することで，例外のない分布になることを示す。

6. 【作品】の再分類

内主語が同じ作品「字」でありながら，容認される文 (a) と容認されない文 (b, c) がある。

(9a) *karjaa* *zii=nu=du* *kagi+munu.*
3SG.TOP 字=NOM=FOC 綺麗+AJLZ
「彼は字が綺麗だ。」

(9b) **karjaa* *zii=nu=du* *miijasi+munu.*
3SG.TOP 字=NOM=FOC 見やすい+AJLZ
「彼は字が見やすい。」(彼が書いた字を褒めている)

(9c) **karjaa* *zii=nu=du* *taka+munu.*
3SG.TOP 字=NOM=FOC 高い+AJLZ
「彼は字が高い。」(高名な書家である彼が書いた字は高く売れる)

(10a) *karjaa* *zii=nu=du* *kagi+zii.*
3SG.TOP 字=NOM=FOC 綺麗+字
literally「彼は字が綺麗（な字）だ。」

(10b) **karjaa* *zii=nu=du* *miijasi+zii.*
3SG.TOP 字=NOM=FOC 見やすい+字
「彼は字が見やすい（字だ)。」(彼が書いた字を褒めている)

(10c) **karjaa* *zii=nu=du* *taka+zii.*
3SG.TOP 字=NOM=FOC 高い+字
「彼は字が高い（字だ)。」(高名な書家である彼が書いた字は高く売れる)

(9a-c), (10a-c) はいずれも「彼の字」という所有関係として理解されるから，角田の所有傾斜の分類に従うと内主語はいずれも【作品】ということになる。しかし，(9a)(10a) における「字」は，彼が生み出した作品について述べているというよりも「彼」がどういう人であるかを特徴付けるために使われている。実際，(9a)(10a) は，「彼はどんな人？」という問いに対する答えとして自然な文である。(9a)(10a) は一回書いただけの「字」について述べているわけでないため，これが「彼」の元を離れて他人の所有物 (cf.(9c)(10c)) にすることもできない。

これらのことから，現在【作品】として一括りにしているものの中には，より【属性】に近いものが存在していると言える。本発表では，得られた新城の例文に対して，「彼はどんな人？」に

対する答えとして適切だと判定された例(例えば(9a)(10a))を【作品】から除外し，【属性】の一種だと考えて再分類する（以下の**表** 3)。これらを以下では【派生属性】と呼ぶことにする。上例の他の【派生属性】の例については**付表** 1,2 を参照されたい。

なお，【派生属性】は，二重主語文にできないと判断する話者もいる点で，これまでの分類における【属性】(体重，身長など，以下では【固有属性】)と区別すべきである。よって，「属性」カテゴリーに下位区分を設ける (**表** 3)。

表 3. 新城方言の二重主語文と所有傾斜（最終版）

	身体部分	属性	衣類	親族	愛玩動物	作品	その他
形容詞述語	○	○	×	×	×	○/×	×
名詞述語	○	○	○	○/×	×	○/×	×

派生属性	「彼はどんな人？」の答えになりうる
作品	「彼はどんな人？」の答えにならない

	身体部分	属性		衣類	親族	愛玩動物	作品	その他
		固有	派生					
形容詞述語	○	○	○	×	×	×	×	×
名詞述語	○	○	○	○	○	×	×	×

6. おわりに

本発表では，新城方言の二重主語文に関して，所有傾斜の観点から記述を行った。その結果，所有傾斜により，新城方言の二重主語文の使用制限が説明でき，形容詞述語文の方が許容される領域が狭いことがわかった (上の**表** 3) 。所有傾斜のある地点で形容詞述語文の二重主語文が可能なら，名詞述語文の二重主語文も可能である。

今後の課題は以下の通りである。まず，二重主語文の使用可能領域について，名詞述語文が形容詞述語文より広い原因について，なぜそのようになるのかを解明する必要がある。次に，現在広く知られている所有傾斜の【作品】の中には【属性】と考えるべきものが含まれている可能性を指摘したが，これが通言語的に妥当な解釈なのか，考察を進める必要がある。

略号一覧：

接語境界:=; 1:一人称; 3:三人称; AJLZ: 形容詞化; DHD: 準複合; FOC: 焦点; GEN: 属格; NOM: 主格; SG: 単数; TOP: 主題

参照文献：

Heine, B. (1997) *Cognitive Foundations of Grammar*, Oxford University Press/**三上章**(1957)『新訂版現代語法序説』，刀江書院，東京/**尾上圭介・木村秀樹・西村義樹** (1998) 「二重主語とその周辺」『言語』27(11):90-108/**王丹凝** (2019)「南琉球宮古語城辺町新城方言の文法概説」修士論文，九州大学/**Pellard, Thomas (2015)** The linguistic archeology of the Ryukyu Islands. In Heinrich, Patrick & Miyara, Shinsho& Shimoji, Michinori (eds.), *Handbook of the Ryukyuan languages: History, structure, and use*, 13–37. Berlin: De Gruyter Mouton/**下地理則・松岡葵・宮岡大** (**印刷中**) 「宮崎県椎葉村尾前方言における形容詞述語文の格標示」木部暢子・竹内史郎・下地理則編『日本語の格表現』東京：くろしお出版/**角田太作** (1991) 『世界の言語と日本語』東京：くろしお出版.

付表 1. 形容詞述語【作品】調査結果

ID	内主語	新城方言の文の標準語訳	話者1	話者2	話者3	「どんな人」テスト
[1]	字	彼は字が綺麗だ。	○	○	○	派生属性
[2]		彼は字が大きい。	○	○	×	派生属性
[3]		(書道家である)彼は字が高い。	×	×	×	作品
[4]		彼は字が見やすい。	×	×	×	作品
[5]	絵	彼は絵が綺麗だ。	○	×	×	派生属性
[6]		(小さい絵を描く人もいるが)彼は絵が大きい。	×	×	×	作品
[7]		(前衛的な画家に比べ)彼は絵が分かりやすい。	×	×	×	作品
[8]	話	彼は話が長い。	○	○	○	派生属性
[9]		彼は話が分かりやすい。	×	×	×	作品
[10]	歌	(彼が作る歌の特徴として)彼は歌が長い。	×	×	○	派生属性
[11]		(歌手である)彼は歌が綺麗だ。	×	×	×	作品
[12]		(一曲幾らで生計を立てる)彼は歌が高い。	×	×	×	作品
[13]		(歌手である)彼は歌が分かりやすい。	×	×	×	作品
[14]	本	(作家である)彼は本がおもしろい。	×	×	×	作品
[15]		(作家である)彼は本が分かりやすい。	×	×	×	作品
[16]	生花	彼は生け花が綺麗だ。	×	×	×	作品
[17]	料理	彼は(作った)料理がおいしい。	×	○	×	派生属性
[18]		彼は(作った)味噌汁がおいしい。	×	×	×	作品
[19]		彼は(作った)味噌汁がおいしい。	×	×	×	作品

付表 2. 名詞述語【作品】調査結果

ID	内主語	新城方言の文の標準語訳	話者1	話者2	「どんな人」テスト
[20]	字	彼は字がきれいな字だ。	○	○	派生属性
[21]		彼は字が大きい字だ。	○	○	派生属性
[22]		（書家の彼について）彼は字が高い字だ。	×	×	作品
[23]		彼は字（字体／作品）が楷書だ。	○	×	派生属性
[24]	絵	彼は（描く）絵がきれいな絵だ。	×	○	派生属性
[25]		彼は（描く）絵が油絵／水彩絵だ。	×	×	作品
[26]	話	彼は話が（いつも）長話だ。	○	○	派生属性
[27]	歌	彼は（作る）歌が三味線の歌だ。	×	×	作品
[28]		彼は（作る）歌が長い歌だ。	×	×	作品
[29]		彼は（作る）歌が早口な歌だ。	×	×	作品
[30]		彼は（書く）本がおもしろい本だ。	×	○	派生属性